

日本語教育と国語教育の接点

—だ・である体の習得について—

沖 裕 子

キーワード：日本語教育 国語教育 だ・である体 です・ます体
テキストの意味構造

要旨

音声言語における「です・ます体」テキストと、文字言語における「だ・である体」テキストの表現様式の相違は、指示詞・文体的特徴・待遇表現という要素的な分布のレベルと、テキストの意味的構造という全体に関わるレベルの両者に存在することを述べる。調査によれば、母語話者と日本語学習者では、両テキスト間の変換の際に問題となる点に異同がある。要素的な対応関係の変換に関しては日本語教育と国語教育に独自の問題領域が存在するが、意味的構造の変換という全体の「理解と表現」に関わる課題は、両教育の共通課題である。

1. はじめに

「です・ます」は、文法論の立場から仁田(1991)、益岡(1991)、森山(1989)などが明らかにしているように、「聞き手」目当てのモダリティ形式である。従って「です・ます」を有する文は、聞き手に対して発話されるという性格を有する。

文法論的には「です・ます」はひとつの形態であり、ひとつのカテゴリカルな意味を有するものである。しかしそれが実際に使用されたテキストという単位体において見ると、「です・ます」は媒体のあり方から二種の表われ方をするといえる。

言葉は、その表現媒体から、音声言語と文字言語とに大別される。音声言語とは、音声という媒体を用いて発話・使用された言語、文字言語とは文字という媒体を用いて書かれ、使用された言語であると定義しよう。テキストには、発話媒体という観点から分類して音声言語テキストと、文字言語テキストという二種が認められる。

文字言語テキストは、文字列のみで「文脈」を作り得るが、音声言語テキストは文字列のみでは「文脈」は完成しない。音声そのものの調子や身振り、話し手と聞き手に共有される場面という視覚情報や社会的心理的環境により構成される非言語的情報などが関与して、全体が「文脈」を作り出していく。そこで、音声言語テキストから文字列のみを取り出した場合、これは不完全なテキストということになるが、仮にこのスクリプトされた文字列のみのものを音声言語テキスト2とし、この2の方を、以後便宜的に音声言語テキストまたは話し言葉テキストと呼ぶことにする。(それに対比させて、文字言語テキストの方を書き言葉テキストと呼ぶことがある。)

音声言語テキストと文字言語テキストを比較すると、発話媒体の異なりを背景とした性格

の相違が存在する。

「です・ます」を用いた文によって構成されたテキストのスタイルを「です・ます体」、
「だ・である」の文によって構成されたテキストのスタイルを「だ・である体」と呼ぶ
が、¹⁾文という抽象的単位体ではなく、使用媒体を背景にして抽出した単位体すなわちテキ
ストを観察対象にすると、実際には以下の四種の類型的文体が認められることになる。

- 音声言語テキストにおける「です・ます体」
- 音声言語テキストにおける「だ・である体」
- 文字言語テキストにおける「です・ます体」
- 文字言語テキストにおける「だ・である体」

本論は、聞き手を想定し実際に話し掛ける文体のテキストである音声言語「です・ます
体」を、具体的な聞き手から開放され文字列のみで文脈を形成するという性格が最も強い文
字言語テキスト「だ・である体」に変換する、という操作を通じて、テキストの理解・表現
の様式に関して両文体がどのように異なるかについて言及するものである。

文字化をした実際の「です・ます体の音声言語テキスト」を、「だ・である体の文字言語
テキスト」に変換し、両テキストの性格の差異について、ひとまず観察しえたところを整理
するのが、以下第2節である。

母語話者と日本語学習者とがそれぞれどのような変換を試みるか調査結果を示し、テキ
ストの理解・表現に関して日本語教育・国語教育のそれぞれに存在する独自の学習課題と共通
する学習課題について第3節以下に言及する。

2. 音声言語テキストと文字言語テキストの性格

2. 1 「です・ます体」と「だ・である体」との変換

すでに述べたように、意図するところは、音声言語テキストにおける「です・ます体」を
文字言語テキストにおける「だ・である体」に変換することにある。

さて、次に掲げる(1)は、『MacAcademy ビデオトレーニングシリーズ1』というマッキ
ントッシュパソコンのユーザーのために作成されたごく初歩的な使い方を説明するビデオテ
ープの冒頭部分を、論者が文字化したものである。以下(1)は、実際に視覚的場面が提示され
る中で聞き手に語られた話し言葉を、文字化したものである。「です・ます・でございます」
が使用された話し言葉テキストの一例といえる。(便宜的に、文の順番に従って、番号をふ
つておく。)

- | | |
|-----|---|
| (1) | <p>① マックアカデミービデオトレーニングシリーズへようこそ。</p> <p>② ここで、インストラクターをつとめさせていただきます、わたくし、スワップと
申します。</p> <p>③ このテープでは、マッキントッシュを操作するにあたって、知っておく必要のあ
る基本的な操作についてお話しさせていただきます。</p> <p>④ まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要のあるコード
などに関して、お話しさせていただきます。</p> <p>⑤ このうしろのパネルにこのようにいろんなポートがございます。</p> |
|-----|---|

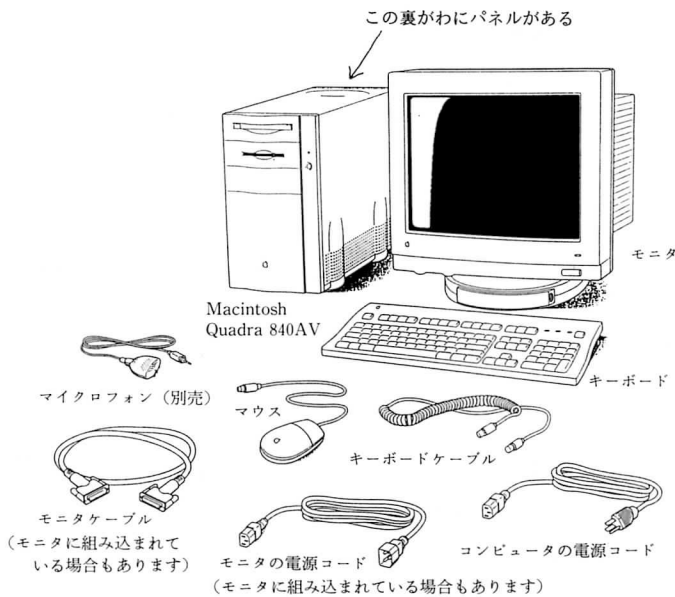
- ⑥ また、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されておりますが、接続をなさる時にはそのコードのはしについておりますアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせていただければいいわけです。
- ⑦ たとえばマウスがございしますが、マウスのコードのはしに、このようなアイコンがついております。そこについているアイコンと、うしろのパネルのアイコンを合わせてさしこんでいただければいいわけです。
- ⑧ 次に、キーボードについてお話ししたいと思います。その前に今接続していただいたマウスですけれども、左利きの方の場合にはこの左の部分に、あるいは右利きの方でしたら、右の部分に差し込んで使っていただくこともできます。
- ⑨ このキーボードですが、使用なさっているマッキントッシュの機種によって、多少キーの配列が違いますので、そこは注意なさってください。

さて、この(1)から、④⑤⑥の部分抜き出したものが以下(2)である。分量の点を考慮しつつ、話し言葉テキストと書き言葉テキストの違いがよく表われている部分を切り取ってみた。²⁾

- (2) まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要のあるコードなどに関して、お話しさせていただきます。
- まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要のあるコードなどに関して、お話しさせていただきます。
- このうしろのパネルにこのようにいろんなポートがございします。また、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されておりますが、接続をなさる時にはそのコードのはしについておりますアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせていただければいいわけです。

なお、(1)(2)のままでは、理解困難な箇所が出てくるので、図1を添える。

【図1】 マッキントッシュのパソコン



2. 2 形式的・要素的な変換

(2)の話し言葉テキストを、「です・ます・でございます」を用いない書き言葉の様式を持ったテキストに変換するにはどのようにしたらよいだろうか。

仮に単純に、「です・ます・でございます」を「だ」等に形態的に置き換えると次のような文章ができあがる。³⁾

(3) まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要のあるコードなどに関して、お話しさせていただく。

このうしろのパネルにこのようにいろんなポートがござる。また、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されておるが、接続をなさる時にはそのコードのはしについておるアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせていただければいいわけだ。

(3)は、たしかに文末は「です・ます・でございます」から、「だ」に変換されているが、これでは適切な文章とはいいがたい。このことから、「です・ます」を用いたテキストと「だ」を用いたテキストは、それぞれ別の表現の仕組みを有していることが推察されるのである。

それでは、この「です・ます体」のテキストを、「だ・である体」のテキストに適切に変換するという操作をさらに続け、両テキストの差異についてさらに考察をすすめたい。(2)を適切な「だ・である体」のテキストに変換するには、その話し言葉的な特徴に注目する必要がある。次のような点である。

(ア) 指示詞における現場指示の用法

(イ) 単語の文体的特徴・文体と連動した特定の言い回し

(ウ) 上下待遇表現・授受表現⁴⁾

指示詞については、以下の下線を施した「この」「このように」のような、境遇性のある用法は変換しなければならない。

(4) このうしろのパネル

このようにいろんなポート

単語の文体的特徴に関しては、以下のような単語を「文章語」に変換する必要がある。⁵⁾

(5) いろんな

また、

(6) おる

は、共通語の場合、「ます」の後接なしに用いられることはないため、変換を要する。

さらに特定の言い回しについても、変換する必要がある。この場合は、次のような表現があげられるが、典型的な文体に応じた使用の分布、という観点で考えると単語の文体的特徴と共通した課題としてまとめることができる。

(7) いいわけだ

また、上下待遇表現・授受表現については、結果的に聞き手に対する待遇を表している、以下のような表現は変換する必要がある。

(8) お話しさせていただく

接続をなさる

合わせていただく

さて、上記のような点に着目し、「です・ます・でございます」文体を改めると、ひとまずは一例として次のようなテキストが出来上がる。

(9) ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要のあるコードなどに関して話す。

うしろのパネルに色々なポートがある。また、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されているが、接続する時にはそのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせればよい。

2. 3 テキストの意味的構造に関する変換

一見すると、(2)を書き言葉へ変換する操作は、(9)で完了しているように見えるが、実際にはそうではない。

文体の変換という時に一番難しいのは、テキストの構造に則した変換にある。

すなわち、(2)は、(1)という大きなテキストの中の一部分である。そのテキスト全体が表現したいことを損なうことなく、ある様式(スタイル)からある様式(スタイル)へと変換すること、それは、2. 2 で見てきたいわば「要素の変換」の問題を超えている。

(1)の④～⑨はコード、キーボードについての説明になるが、これらは、「マッキントッシュを起動する前」にすることに入れられる。すなわち、④以降で取り上げられることがらを、それぞれの文番号に従って書き出すと次のようなことになる。

(10) ④マッキントッシュを

	起動する前にすること	コード		接続
⑤	//	コード		接続
⑥	//	コード		接続
⑦	//	コード	マウス	接続
⑧	//	キーボード	マウス	接続
⑨	//	キーボード		()

④の「マッキントッシュを起動する前にすること」は、以下④から⑨までを覆っているテーマである。

また、各文で述べられていることは、単一のことからではない。「物」に則して④⑤⑥⑦は「コード」、⑧⑨は「キーボード」について。さらにコードやキーボードに関連して取り扱わなければならない「物」であるマウスも重複して取り上げられている。

しかし、一方④から⑧までは、「接続」という「事」が扱われている。⑦⑧で「コードとマウス」「キーボードとマウス」が結び付けて述べられるのも、それは「接続」というテーマがこれらの複数の「物」の登場に必然性を与えているのである。

ちなみに、(1)は⑨で切っているので、⑧に登場した「物」の流れにある「キーボード」が、⑨以下どのような「事」の中に位置づけられるかは、不明のままに終わっている。

今見てきたように、話し言葉テキストであるがゆえの、テキストの意味的な構造に関する「未整理」が(10)によって、ある程度明らかになった。(2)として取り出した文章(④⑤⑥)のみで見れば、「コード」を「接続」することであるので、どちらを主に述べてもよいのであるが、(2)は④に「マッキントッシュを起動する前にすること」というテーマが述べられてお

り、また、以下に続く⑦⑧⑨のテキスト全体の構成を考えれば、「接続」というトピックを中心に「述べ直し」すなわち、構造の組み替えを行なった方が、より適切であるということが分かる。

原文をできるだけ生かして変換した試みの一例を示せば、次のようになる。⁶⁾

(ii) まず、マッキントッシュを起動する前に、コードを接続する。

本体のうしろのパネルに複数のポートがあり、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されている。コードのはしにも表示されているアイコンと、ポートの上に表示されているアイコンとを合わせて、差し込む。

こうした変換を、

(エ) テキストの意味的構造に関する変換

とまとめておく。⁷⁾

3. 母語話者と日本語学習者の文体変換能力の調査

調査は、1994年10月4日、信州大学人文学部の「日本語教授法」の受講者に対して行った。日本語を母語とする学生13人（以後母語話者と呼ぶ）、日本語を母語としない学生6人（以後、日本語学習者と呼ぶ）、計19人である。（日本語学習者は受講者は4名。他2名は、別に趣旨を説明して協力を求めた。）出身者の母語は、5人が中国語（台湾語3人、マレーシア中国語2人）、1人がカナダフランス語である。

調査票（以下）を配り、口頭で説明したのち、「自分が納得のいくまで書く」ことを求めた。9時15分に説明を始め質問を受けたあと、9時25分から始め、10時25分に回収した。10時前後に仕上げた学生が現われたがそのまま着席を求めた。約半数近くは時間一杯考えて書いていた。

【調査票】

問題：次の【文章Ⅰ】をまず読みなさい。質問①②③に答え、次の頁の【問題】に進みなさい。（辞書を使ってもよい。）

【文章Ⅰ】 前述(1)（ただし図1を添えた）

語句： インストラクター……指導する人
 マッキントッシュ……コンピュータの名前
 パネル………板
 ポート………さしこみ口
 左利き（ひだりきき）…左手の方が上手に使える人、またそのこと。
 右利き（みぎきき）……右手の方が上手に使える人、またそのこと。
 機種（きしゅ）………機械の種類
 配列（はいれつ）………並べ方

質問① あなたはワープロ・パソコンを実際に操作したことがありますか？
 （一回でもよい。上手下手は問わない）

はい いいえ

質問② 上記の文章中、意味の分からない単語や、部分があったら、【文章Ⅰ】のその部分に、太く下線を引いて下さい。

質問③ 学籍番号 名前 記入日 1994年10月 日
言語経歴〔0才から18才までの居住地〕 県 市 国

【問題】

以下の線で囲んだ部分の文章〔前述(2)〕を「です・ます・でございます」を使わない文章に改めなさい。(鉛筆を用いること)

- A. まず、単純に考えて「です・ます・でございます」を使わない文章に書きなおしなさい。
B. 【文章Ⅰ】は、話されたものを書き取った文章である。【文章Ⅰ】が言いたかった内容を汲み取り、Aを書き言葉として通用する文章に書き換えてみなさい。【文章Ⅰ】として言いたかった内容が変わらないこと、文章として整ったものになること、の二点を守ればどのように文章化してもよい。「です・ます・でございます」を使わない書き言葉として、文章化すること。

4. 調査結果

4. 1 結果一覧

以下、調査票問題Bの結果を母語話者と日本語学習者に分けて、以下に掲げる。(a)から(m)が母語話者、(A)から(E)が、日本語学習者である。⁸⁾

【母語話者】

- (a) まず、マッキントッシュを起動する前に、コードの接続の仕方について説明しよう。
マッキントッシュ本体のうしろにあるパネルには、いろいろなポートがある。そして、その上にはアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されているので、接続をする時には、そのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせればよい。
- (b) まず、マッキントッシュを起動する前に、必要なコードを接続してみよう。
パソコン本体の裏側を見てみると、いくつかのポートと呼ばれるさしこみ口がある。その上についている小さな絵が、接続する時の目印となるアイコンである。
同じように、接続するコードのはしにもアイコンがついているので、そのアイコンとポートの上のアイコンとを合わせて接続すればいいのである。
- (c) まず、はじめに、マッキントッシュを起動する前に、コードなどの接続の仕方に関して説明したい。
本体のうしろのパネルに、いろんなポートがある。また、その上と、コードのはしにアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されている。接続の際には、そのアイコンを合わせていただければよい。
- (d) ①コードの接続
マッキントッシュを起動する前にコードを接続する。本体の裏がわのパネルにいくつかポートがあり、その上にアイコン(小さな絵)が表示されている。コードのはしにもアイコンがついているので、同じアイコンのついたポートにコードを接続する。

(e) マッキントッシュを使う前に—接続のしかた—

コードの端には小さな絵（アイコンという）があるので、機械側の同じ絵のところに差し込めばよい。

(f) マッキントッシュを起動する際、その基本的な操作について説明する。マッキントッシュには、モニタとキーボードを除いた機械の裏側のパネルに、いろいろなポートがついている。接続をする場合、ポートの上に、小さな絵が表示されているアイコンと、そのコードのはしについているアイコンとをつなぎ合わせればよい。

(g) まず、ここでは、マッキントッシュの起動前に、接続の必要なコード等について説明する。

マッキントッシュ本体の裏側のパネルに、いろいろなポート（さしこみ口）があり、その上にアイコン（小さな絵）が表示されている。

また、コードのはしにもアイコンがついているので、接続をする時は、それと同じアイコンが表示されたポートに接続する。

(h) まず、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要があるコードなどに関してであるが、このうしろのパネルにこのようにいろいろなポートがある。そして、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されている。接続をする時にはそのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせればよい。

(i) まず、ここでの話しは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要があるコードなどに関してである。

マッキントッシュ本体の裏側にパネルがついていて、そこにコードを指すためのさしこみ口（ポート）がいろいろとある。また、その上に、アイコンと呼ばれる小さな絵が表示されているが、接続する時には、コードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせて指しこめば良いのである。

(j) まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に接続する必要があるコードなどに関して、説明する。

このうしろのパネルには、このようにいろいろなポートがあり、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されている。接続する時には、そのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせればよい。

(k) まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要があるコードなどに関して述べておこう。

このうしろのパネルにこのようにいろんなポートがある。また、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されているが、接続する時にはそのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせればよいのである。

(l) まず、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要があるコード等について説明する。本体のうしろ側にはいろいろなポートがあり、そのポートの上にはアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されているのだが、接続を行なう際には、そのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせるようにする。

(m) まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要があるコードなどに関して、述べさせていただく。

マッキントッシュの本体のうしろのパネルに様々なポートがある。また、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されているが、接続をする時には、コードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせていただければよい。

【日本語学習者】

(A) マッキントッシュを起動する前に、まず接続する必要のあるコードなどに関して、紹介する。

うしろのパネルにいろんなポートがあり、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されている。接続する時にはコードのはしについているアイコンをポートの上にあるアイコンと合わせてさしこめばいい。

(B) まず、マッキントッシュという機種のコピュータをスタートする前に、接続する必要のあるコードなどについて、お話しする。

本機のうしろの板にいろいろなポートがある。ポートはさしこみ口のことである。また、さしこみ口の上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されてあるが、接続する時には、そのコードのはしについてあるアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせればいいわけである。

(C) 以下は、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要のあるコードなどについての説明である。

マッキントッシュの裏側のパネルに、いろんなポートがあって、上にはアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されている。接続をする時には、そのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせて下さい。

(D) まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に、接続する必要のあるコードなどに関して話したいと思っている。

マッキントッシュのうしろのパネルにはいろいろなポートがある。その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されているが、接続をする時にはそのコードのはしについているアイコンと、ポートの上にあるアイコンとを合わせればいいわけである。

(E) まず、ここでは、マッキントッシュを起動する前に接続する必要のあるコードなどに関して、お話をください。

このうしろのパネルにこのようないろんなポートが

また、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表されている。けれども接続をなさる時にはそのコードのはしについて、アイコンとポートの上にあるアイコンとを合わせていただければいいわけである。

(F) 始まるよ！ 最初に、マッキントッシュを起動する前に、接続するためにコードとか必要だから、今説明するよ

見て、うしろのパネルにいろんなポートがある。上に小さな絵をつくて見える。これはアイコンだ。接続をする時は、そのコードのはしにつく。で、アイコンと合わせれば問題にならない。

4. 2話者・項目別の結果

上記の結果を、母語話者と日本語学習者別に項目ごとにまず整理比較することにする。

以下、正しく変換できなかった者の実数とパーセンテージ及び、該当用例の番号をあげる。
 なお、母集団が小さいので、パーセンテージを出すことは意味が薄いですが、母語話者と日本語学習者の両集団の比較のために参考として数字をあげる。

(ア) 現場指示の用法の変換（2項目）

「このうしろのパネル」「このようにいろいろなポートがあり」の二箇所に見られる「この」「このように」の現場指示の用法を、言い換えや省略によって言語文脈のみの説明に変換できなかったケースは以下の通り。変換していない場合は両項目ともにできていなかった。

母語話者	3人 (23%)	(h)(j)(k)
日本語学習者	1人 (17%)	(E)

(イ) 単語の文体的特徴（2項目）

「いろんな」を「いろいろな」と変換しなかったケース。ただし「いろいろ」という語句を用いていない者があるので、分母の割合はこの語句を用いている者とした。分母は母語話者が9人、日本語学習者が5人である。

母語話者	2人 (22%)	(c)(k)
日本語学習者	4人 (67%)	(A)(C)(E)(F)

「わけだ」という表現をそのまま残した者。

母語話者	0人 (0%)	
日本語学習者	3人 (50%)	(B)(D)(E)

「おる」を「いる」に変換しなかったケースは、母語話者、日本語学習者ともにみられなかった。

(ウ) 上下待遇表現・授受表現（3項目）

授受表現を待遇形にした表現が「お話しさせていただく」「合わせていただく」。授受表現ではない上下待遇表現については「接続なさる」がある。それぞれを変換していない数値を以下に示す。

「お話しさせていただく」

母語話者	1人 (8%)	(m)
日本語学習者	1人 (17%)	(E)

「合わせていただく」

母語話者	2人 (15%)	(c)(m)
日本語学習者	2人 (33%)	(C)(E)

「接続なさる」

母語話者	0人 (0%)	
日本語学習者	1人 (17%)	(E)

(エ) テキストの意味的構造に関する変換（テキスト全体に関する項目）

「接続」というトピックを中心に「述べ直し」ができなかった者。

母語話者	7人 (62%)	(g)(h)(i)(j)(k)(l)(m)
日本語学習者	6人 (100%)	(A)(B)(C)(D)(E)(F)

5. 日本語教育と国語教育に共通する課題 — 結論にかえて —

上記の結果を以下分析したい。日本語教育と国語教育とに共通する課題、独自の課題という観点から考察を述べていく。

(ア) 「この」「このように」など、現場指示の用法をそのまま残したケースが母語話者で3人あった。(h)(i)(j)のこれらのケースでは、文体の変換に伴ってテキストの構造的変換を行うという、内容に関する変換も行われていなかった。テキストの内容をよく理解し、それを相手に伝達するという点に関する意識的な訓練が必要なケースである。

むしろ日本語学習者では、こうした変換の誤りは少ない。指示詞の用法は比較的早い段階での学習事項であり、意識化ができていていることによると思われる。

文脈指示、現場指示の用法は、国語教育の場では明確な文法の学習事項ではない。しかし、文章理解と表現に関係してくると思われるこうした用法は、言語に関する少し意識的な考察の対象として項目をたててもよいようである。

(イ) 単語の文体的特徴に関しては、日本語学習者の方が難渋している。「いろんな」を「いろいろな」に変換するという操作は、言語の表現と伝達という点から見れば、いわば「洗練度」に関するもので、変換がスムーズに行われなくても、敬語項目のように社会活動における齟齬をきたすということもない。学習の比重が日本語教育においては相対的に下がるためであろう。しかし、敬語ほどではないとしても、こうした文体的特徴に留意しない表現の習慣が形成され続けると、母語話者とのコミュニケーション上何らかの違和感をひきおこすことも充分考えられる。今後研究の必要な分野であろう。

なお、母語話者でも、「いろんな」を「いろいろな」という文章語に変換しえなかったケースが9例中2例ある。うち一人(c)は、「ていただく」形も変換せず残している。

「わけだ」を残した母語話者は一人もいないが、日本語学習者では、半数がこれをそのまま残している。

文体と関係する語彙・言い回しの分布は、母語話者にとって意識的な事項と非意識的な事項とに分かれ、意識的な事項すなわち選択的な表現が可能な部分については、個人差が生じるのであろう。「いろんな→いろいろな」や「ていただく」などの敬語形の変換は母語話者にとっても選択的な表現の部類に入り⁹⁾、「わけだ」のように語彙的ではなく文全体と関るような言い回しはどちらかというと後者に属するのであろうか。

一方日本語学習者にとっては、この事項に関してすべてが程度の差はあれ選択の対象に入ってくるため、かなり明示的な研究とよい辞書とが今後必要になろう。

(ウ) 上下待遇表現・授受表現は、日本語学習者においては、(E)以外はおおむね変換している。日本語教育の場においては、敬語形式については、使い分けが必要であることの理解が成立していることと関係があろう。むしろ、(c)(m)という母語話者は、「お話しさせていただく」「合わせていただく」「接続なさる」という三項目の敬語関係の表現を1ないし2項目のみ変換してあとは残し、文体を整えるという観点からは、意識の不足が見られるものである。確かに文体には「変化とリズム」が必要であり、それは各人の美意識と関わっていることもまた事実であるが、こうした「調査」の場ではそのような個性的な意識が発揮さ

れたとは考えにくい。

(エ) 文体の変換に伴ってテキストの構造的変換をしていない者は、母語話者でも半数以上おり、日本語学習者では全員がそうであった。(ア)から(ウ)の問題が、どちらかという「要素」を取り出してそれを別の要素に変換するという性格を有しており、ある程度機械的な変換が可能であるのに対して、(エ)は決して機械的にはいかない。テキストの理解、すなわち言葉で語られた内容の理解という過程が必ず必要になるのである。理解する能力の上にならなくて、述べ直しという言語能力が始めて問題にされる。

佐久間編(1994)が、「要約」を「大意を把握する」ということに限定し、大意の文章化の成功度を、中心となる文の残存率を調査することによって測ろうとしている。「大意」をいかに把握するか、しているか、させるかという研究を明示的に行おうとする点で説得力がある。

ところが、文章の中心となる複数の文を残しながら、全体を小さな文章に縮めるという作業は、実は最終的な理解の確実度は保証していないともいえる。ある程度読み解ければ、いわば作業的にそれを行うレベルに到達する。本当に測りたいことは、その文章を理解したかどうか、即ちそこで述べられている内容世界、ものごとやことがらの世界の理解に到達したかどうか、また、それを当該の言語で表現できるかどうかという二点であろう。

よく「自分の言葉で述べ直す」ということが言われるが、原文に則しながら理解・表現活動が確実に行われていなければ、そこに到達することができない。この「自分の言葉で述べ直す」ということの仕組みを計る尺度が今まで明らかではなかったことが問題であった。本論で述べたような話し言葉文体から書き言葉文体に変換できるかどうかは、そうした問題に関する明示性を提供してくれる素材のひとつであると主張したい。

内容世界を把握しつつ理解に到達し、それを表現内容として、改めて異なる文体様式で表現しなおすというのが(エ)の作業である。

うちとけた自然な親しい者、傍らに住む者との言語生活で獲得する母語、それはすなわち方言に他ならない。そうした話し言葉の言語コードの使用者から、さらに広い世界へと踏み出す時にはさけて通れない言語理解・表現の訓練が必要になる。(エ)の作業は話し言葉コードを書き言葉コードへと変換することであり、表現様式の変換を通して、表現内容の理解そのものを確認する作業である。母語話者にとってはそれは書き言葉という新しいコードの習得という学習であり、日本語学習者にとっても、異言語のコードで行なうという違いはあるものの、本質的に同じ課題を含んでいる。「学習」という点では(エ)の課題は、日本語教育、国語教育に共通する到達すべき目標のひとつである。

以上、本論は、テキストの理解・表現に言語がどのように関るかという問題意識を基底にして、類型的な文体の変換という観点からささやかな調査を行いながら、テキストの語彙・意味的構造について言及した。また、日本語教育・国語教育においてそれぞれ課題となる点のいくつかを提示した。

【注】

- 1) 「だ体」と「である体」は別の様式であると考えられることができるが、ひとつのテキストに両形式の混在を許す場合もあるため、ここではゆるかやかに捉えておく。なお「だ・である」体と

- は、文末がすべて「だ・である」で終わるということを意味しない。
- 2) 音声言語テキストと文字言語テキストとは連続している部分がある。当テキストがどのような話し言葉テキストであるかの位置付けが必要であるが、本論では紙幅の関係でそれには触れずに進める。
- 3) 真田(1988・1989)は、両文体間の自動変換の問題を扱っており、それは主として文末部分の対応関係をいかに相互に置き換えるかという観点に絞られている。形態論的には有効な研究となっている。
- 4) 「上下待遇表現」は菊地(1980)の用語。いわゆる尊敬語と謙譲語とを合わせた概念。
- 5) 単語の文体的特徴については、宮島(1977)、沖(1985)参照。
- 6) なお、「このうしろ」の「この」を「本体」という単語で置き換えること、「差し込む」ことがコード類の接続の仕方であることは、「ことがらに関する知識」がなければ、補えない。しかし、ビデオで視覚情報として指示されていたことがらを汲み取り、正確に文字に写し取るためには、これらのことがらの言語化が必要であるということの判断は、「言語」の理解のレベルの問題であることは言を待たない。また、「本体」という単語は知らなければ使い得ないが、別の表現は工夫ができるし、また、接続することが「差し込む」ことであるということは、⑧の文の言語的理解によって到達することが可能な知識であると言える。
- 7) ちなみにこれをさらに「です・ます体」に変換すれば、次のようになる。以下の「です・ます体」は、(1)(2)にみた、話し言葉の「です・ます体」ではなく、テキストの構造上は十分に整理された、書き言葉の「です・ます体」になっている。
- まず、マッキントッシュを起動する前に、コードを接続します。
- 本体のうしろのパネルに複数のポートがあり、その上にアイコンと呼ばれる小さな絵が表示されています。コードのはしにも表示されているアイコンと、ポートの上に表示されているアイコンとを合わせて、差し込みます。
- 8) 質問②で確認した「パソコン・ワープロを実際に操作したことがない」のは、母語話者では一人(f)、日本語学習者では(A)(F)であった。しかし、すでに述べたように、ここでの【問題】には、こうした知識は必要ない。
- ただし、以下の文例の中に「本体」という専門語を用いている例が多いが、それは「パネルのある部分を何というか」という口頭での質問が出たので、それに答えたためである。
- 9) 「ていただく」は授受表現であるので、文全体の変換を要する。従って「語彙的」とは言えないわけであるが、「ていただく」という敬語形式という点にのみ着目すれば、敬語要素の使用不使用という、要素に着目した判断が働くのだらうと思われる。

【参考文献】

- 沖 裕子(1990)「人称代名詞と発話様式」『花園大学国文学論究』 第18号
 ———(1985)「動詞の文体的意味」『日本語学』第4巻第9号 明治書院
 ———(1994)「話し言葉テキストの性格と電子化テキスト化」『人文科学とコンピュータ』22巻5号
- 菊地康人(1980)「上下待遇表現」の記述」『国語学』122
- 佐久間まゆみ編(1994)『要約文の表現類型——日本語教育と国語教育のために』ひつじ書房
- 真田治子(1988)「文体の自動変換——ダ体からデス・マス体へ」『計量国語学』16巻7号
 ———(1989)「文体の自動変換——デア体への変換」『計量国語学』17巻3号
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

宮島達男（1977）「単語の文体的特徴」松村明教授還暦記念会編『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院

森山卓郎（1989）「コミュニケーションにおける聞き手情報——聞き手情報配慮非配慮の理論——」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版

【言語資料】

『MacAcademy ビデオトレーニングシリーズ1』フロリダ・マーケティング・インターナショナル 1993年